

第1回 札幌市国際戦略プラン懇話会 議事録

日時：平成24年1月27日（金）10：00～12：00

場所：札幌市役所本庁舎18階 第四常任委員会会議室

出席委員：石井座長、雨貝委員、石山委員、加藤（丈）委員、加藤（由）委員、木村委員、熊谷委員、佐藤委員、サムット委員、張委員

1. 開会

2. 委員紹介・座長選出

<事務局>

50音順に自己紹介をお願いしたい。

<雨貝委員>

雨貝尚子と申します。専門は音楽である。現在、北海道オーストリア協会あるいは札幌の音楽専門家が集まる札幌音楽家協議会の会長を務めている。個人的には、ドイツ、オーストリア、ロシア、中国、アメリカ各地にて音楽の演奏や公開レッスン、レクチャーなどを行うことを通して国際交流の一端を担わせていただいている。組織的には、先ほど申したように教育大学、札幌音楽家協議会においても国際交流に力を入れている。これらの経験が今回少しでもお役に立てれば幸いである。

<石井委員>

北海道大学の公共政策大学院におります石井と申します。私はもともと北海道東北開発公庫に長くおり、公共政策大学院は開設時からいるが、主に地域経済、地域政策という分野を担当・研究している。国際的なことに関するものは率直に言えばそんなに強い分野ではないが、経済面から、例えば環日本海交流というようなことについては、北海道東北開発公庫時代に一生懸命やらせていただいた。現在はEUの地域政策などの分野に興味を持ってやってきたので、地域的な広がりの中での経済面での統合過程という風なところを色々見ながら、我が国もどう展開していくかというようなところを考えている。かなり偏った見方になるかと思うが、地域という視点から海外と付き合ったということで、多少視点を提供できればと思っている。

<加藤（丈）委員>

北海道ひびき法律事務所の弁護士の加藤丈晴と申します。私は北海道の「外国人法律支援ネットワーク」という団体を札幌弁護士会の有志で立ち上げている。私は当初メンバーではないが、約10年前に団体が立ち上がり、私は弁護士登録当初からネットワークのメン

バーとして活動をしている。そのネットワークでは、北海道に住んでいる外国人の法律相談を無料でさせていただくということで、相談受付電話に予約をいただいたら担当の弁護士がその案件の担当となり、無償でその方の相談をお受けする。それ以外にも年に数回、札幌国際プラザさんと共催という形で無料法律相談会をしている。

あと、法律についてのセミナーを年に数回開催する活動をしている。他には、弁護士の団体ではないが、市民の方と「多文化共生ネット北海道」という団体の共同代表という形でやっている。月に一回集まり、札幌が中心になるが、観光で来られる方というよりはまさに札幌市内に住んでいる外国人の方々の生活、特に日本の社会文化での生活の中でどういったものが不足しているのかということの研究して、札幌市の国際部さんと、交流や情報交換をさせていただいたこともある。

<加藤(由)委員>

北海商科大学の加藤由紀子と申します。私の専門は観光ビジネスであるが、もう一つは、若い人たち、特に初年次のキャリア形成教育をどうしたら良いかということが第二専門であり、この二つを担当している。あとは、大学の公務として、国際交流センターをお預かりしている。本学では、中国、それから韓国に提携校があり、そちらから留学生を受け入れたり、こちらから派遣したりしている。あとは、北海学園と一緒にいるので、学園の方で交流している、カナダのアルバータ州にあるレスブリッジ大学との交流も行っている。こういった関係から、札幌圏にある大学の国際交流センターの担当者が集まって形成しているフォーラムがあるが、その仕事も担当している。北海道、特に札幌は留学生が多い。では、その留学生たちはどういうことを考え、どういうことが足りなく、また、どういう風に過ごしてもらいたいというのを、本学の学生だけではなくて、北海道、札幌に来る学生にどんどん聞いてみて、それが返ってきた時に、またはそこから何かネットワークが出来れば良いと思っている。外国人の学生に限らず、海外に留学する学生も含めて、学生がどうやって国際化に乗っていくかというところを是非一緒に考えていければ良いと思っている。

<木村委員>

北海道大学の木村と申します。私は今大学生で、文学部の三年次になります。

私自身の国際経験に関してですが、昨年度韓国に留学いたしまして、向こうでの生活を体験した。それ以前から留学生との付き合いというものがあり、彼らと色々話す中で、色々な留学生が抱える問題を切り口として、札幌での生活の問題点にぶち当たってきた。私が一人の留学生として海外にでるという経験を通して、海外で外国人としてその国に暮らすということはどういうことなのかということ深く身に染みて感じる事が出来た。それと同時に、観光で札幌を訪れる、あるいは留学で札幌を訪れるという人たちに対してどういう風に支援をしていけばいいのかという知見を広めるために参りました。今、私自身の

活動としては、学生団体で留学生を支援するという組織を立ち上げている。学生団体なので、資金面では厳しい運営になってはいるが、もともと留学生の支援が薄いと感じていた部分の側面からサポートしていくところから少しずつ活動の輪を広げていっている。また、札幌を訪れる外国の方に関して行政面が一般的にしていることと、実際の現場の乖離を感じるものがたまにある。その部分をいかに市に伝えていけるかということを考え、応募した。

<熊谷委員>

札幌大学の熊谷ユリヤです。よろしく申し上げます。専門は通訳、翻訳論、異文化、コミュニケーション文化、ビジネスコミュニケーションなどである。札幌大学以外では、北海道大学で発話や通訳関係の演習を行い、北海道通訳アカデミーでは約70名のプロ通訳養成を行っている。札幌市との関わりとしては、過去25年ほどさまざまな通訳を通じて関わってきた。最近だと冬の都市市長会議の同時通訳や、姉妹都市関係、PMFの関係の通訳で関わっている。あとは、国際プラザでの講演などで関わっている。海外のこととしては、私がアメリカからの帰国子女であること、オーストラリアに3年ほど住んでいたこと、イギリスにも住んでいたことである。それから詩人も行っていて、世界各国でおこなわれる詩人会議などに行くたびに、私が高校生の頃にあったオリンピックでの札幌の知名度がだんだん薄れてきて、北海道の知名度が勝っているような気がする。札幌っ子としてすごく悔しいので、市長には叱られるかもしれないが、是非またオリンピックを開催して欲しいと思っている。何かお役に立てればと思っている。

<佐藤委員>

札幌都市開発公社の佐藤幹と申します。地下街のオーロラタウンやポールタウンの仕事をしている。併せて、商工会議所の国際貿易委員会の委員長という仕事をやっている。現在、地下街で街おこしのことで仕事をしているが、以前北洋銀行で、国際担当の常務をしていたので、国際関係の仕事には随分長く携わっている。海外にはこれまで、仕事で50カ国くらいは周ったので、色々な街を見てきている。札幌を更に国際化していくという今回の会議のお手伝いが出来ればと思っている。

<サムット委員>

はじめまして、サムットです。この中で外国人は二人で、私はその中の一人である。タイ出身である。最初は国費留学生として日本に来て、北大で勉強をした。専門は地方自治で、自治体の役割をどうすべきか、ということをやっていた。北海道に来てもう12年になる。人生の1/3は北海道にることになるので、何人かわからなくなってしまう。北海道の人と結婚をし、子供は2歳である。彼女は、北海道とタイの間で生まれた子供であるので、これから、子供のためにも自分の経験を通して良い札幌を提案していければ良いと思っています。

いる。札幌に住んでいた留学生としての経験、社会人としての経験、医療通訳やホームステイの案内など色々なボランティア活動に参加した経験などである。また、国際総合授業の一環で小学校や中学校、高校でタイの話をした。現在、主な仕事としては北海道とタイに関係することで、例えば通訳や、北海道で何かをしたいタイ人の相談に乗るなどである。今日は自分の意見をここで活かせればよいと思って参加させていただく。

<張委員>

北海道チャイナワークの張相律です。16年前に札幌にきて、北大を卒業し、北海道チャイナワークという会社を12年前に立ち上げた。今は中国語の通訳・翻訳や、外国語人材の育成、留学生や外国語人材の就職支援、中国旅行などの事業をやっている。最近是中国からの観光客も増えたので、中国からの観光客をいかに北海道に誘致するかということに関する委員会に参加することが多い。また、北海道国際化推進委員会のメンバーにもなっている。サムットも言ったように、自分もここで長いので、自分の子供も日本国籍にしてここにいさせるつもりなので、札幌という街をなんとか良い街にしていきたいと言う気持ちが強く、今回この委員に参加させていただいた。

<事務局>

ありがとうございました。つづいて座長の選出に移りたい。座長は互選により選出することとしている。どなたか立候補または推薦はありますか。

<雨貝委員>

もし立候補がなければ、皆様素晴らしい方々ばかりだが、地域政策、経済政策に精通されている石井先生にお願いできればと思う。

(参加者の承認あり)

<事務局>

それでは石井先生に座長をお願いしたいと思う。

3. 議事

<石井座長>

最初に事務局から資料の説明をお願いしたい。

(資料1～4について、事務局から説明)

<石井座長>

どうもありがとうございました。残された時間を議論の時間にしたいと思っている。三つの論点をそれぞれに分けて議論していき、最後に施策展開イメージ等で意見があればそれについても意見を聞いていきたい。今回は初回であるので、委員の全員から自己紹介をいただいた。途中で来た石山委員から議事に入る前に一言いただきたい。

<石山委員>

JTB 北海道の石山です。法人営業札幌支店で支店長をやっている。仕事の内容は主に北海道発の法人団体の旅行の扱いをしているほか、今中国で言えばチャイナペイと連携を取りながら銀聯在線商城（ぎんれんざいせんしょうじょう）日本館の運営に一部携わっている。あと、東南アジア、タイ、マレーシア、ベトナムの諸国と 2 ウェイ、つまり、一本の飛行機をお互いにシェアして向こうのお客様とこちらのお客様に販売するという仕事もしながら、今、北海道のブランドを海外にどのように伝えていくかという仕事もしている。

<石井座長>

どうもありがとうございます。それでは論点の1「札幌が国際都市を目指す意味は」に関して委員の皆さんから意見をいただければと思っている。発言いただける方には挙手をお願いしたい。それでは、僭越ながら指名して発言をお願いする形にする。最初は佐藤委員に口火を切っていただければありがたい。

<佐藤委員>

資料5の戦略プランはよくまとめてあると思った。「札幌が国際都市を目指す意味」は、戦略プランと連動すると思うが、やはり、街を元気にする、その一つの材料としての国際化、国際都市を目指すということだと思う。資料5別紙の<先進的な国際都市の例>に挙げられた都市と同様に、世界的に札幌という街を認知してもらって、そこからお客さんを呼ぶ、いろんな人来てもらう。それは観光でもあり、M I C Eやビジネスの国際化でもある。とにかく札幌に来てもらえば経済も活発化するし、戦略プラン施策展開イメージ図の左上の「経済」の面での活発化が地元の人々の国際化も促していく。

そのための材料としての札幌市の知名度であるが、我々が思っているほど知られていないのではないかと思う。今回のレポートを拝見すると、国内の人、または札幌市民がどう思っているかということが中心となったレポートであると思う。レポートの「強み」の中に「海外での高い知名度」とあったが、これは本当にそうであろうか。海外から札幌をどう考えるかという調査が少し足りないのではないかと思う。そのことをもう少し盛り込めば、海外から札幌はどのような風にとらえられているかということがわかるので、次の対策に繋がってゆくと思う。

<石井座長>

熊谷さん、お願いいたします。

<熊谷委員>

知名度がないということではない。毎年一か月近くオーストラリアで学生を連れて滞在している。そこで色々な国の人が集まってきて大きなアンケートを取った際に「札幌、北海道、ニセコ」と言えば、ニセコが一番知名度がある。良いことかもしれないが、北海道と札幌を比べると、アジアの中でも北海道の方が、ブランド力が出てきている。私は昔から「北海道出身」ではなくて「札幌出身」と言っている。昔は札幌というブランドがあった。特に北の国の人には「70年代のオリンピック開催地ですね」と言ってくれるなど、知名度は確かにあったのに、知名度が薄れてきているというか、北海道の方が伸びてきているところがある。それから、北海道に来てくれた外国人にアンケートを取るのではなくて、北海道に来たことのない人に聞かないとブランド力というのは調査できないと思う。今は、メールでアクセスしてもらおうと自然にグラフが出来るようなアンケートのサイトなどもあるので、協力できることがあると思う。

<石井座長>

私も知名度のところは同じように感じていた。先ほどの数字から言うと、札幌に来ないで帰る人が現実として2/3くらいいる。北海道ということは認識していても、札幌ということは認識していない外国人の来道者がそもそもいるということ。また、農産品の輸出などを含めて、北海道ブランドというのがだいぶ売れてきたという側面があると思うが、そこで、競争的に、北海道の名に対抗して札幌の名を売っていくという風に考えるのか、それとも補完的に、上手に北海道を使って札幌を更に売り込んでいくのかということも上手く考えていかなければ、非常に無駄になるというか、対立的な概念ではないと思う。

<サムット委員>

東南アジアの人を見ると、札幌より北海道という感じである。私は日本に来る前は北海道すら知らなかった。10年前は北海道のことは誰も知らなかったが、最近では北海道やその市町村の観光関係の団体が頑張っていて、東南アジアで色々なプロモーションをやっているので、今は北海道という名を聞くと、タイの人でも皆行きたいと思うほどになった。東南アジアの人は北海道に来て札幌は一泊で、他は洞爺などを周って、帰りは札幌に寄って帰るのが基本的な動きである。札幌だけに行きたいという人はあまりいない。私は、海外で「札幌の魅力は何ですか」と聞かれると「札幌は北海道の首都です」と言っている。つまり、札幌に行かなければ北海道にまだ行っていないのと同じことであると言う。そのように意味付けしてあげれば良い。札幌はとても魅力があると思う。

札幌が「国際都市を目指す意味とは」という話について、私は札幌や北海道というのは

日本の中でも特別な存在であると思う。なぜかという、ここにいる人は、悪く言えばみんな外国人であり、埼玉や千葉出身の人など色々な国の人が北海道には住んでいる。だからカナダなど、他の国際都市となんとなく似ているところがあると思う。だから、そういう発想からいくと、札幌が日本の中でも一番国際都市を語りやすいのではないかと思う。これからは、日本人の中の国際ではなく、少し拡大して色々な国の人も住みやすく、違和感がないという風に、大きいビジョンとして語る事が出来れば、それが一番良いと思う。

<石井座長>

ありがとうございます。今の視点はすごく大事で、肩肘を張るのではなく、当たり前国際都市であるという視点であると思う。むしろ、必要があって国際化するという側面だけではなく、自然体で異文化をどんどん受け入れていくというというイメージを述べていただいたと思う。若者の木村委員はいかがですか。

<木村委員>

私自身が最近こういうことについて考える時に、ひとつテーマとして考えるのが、「誇れる都市札幌」ということである。私自身の出身は神戸であり、神戸は大体海外で都市の名が知られている。発音で神戸と言ってわからなかったとしても、中国語圏では漢字で書けば大体通じる。一番大きい理由は神戸牛である。しかし、札幌と言ってわかる人というのは少ない。留学中にそれぞれの街について話をすることになった時に、札幌と言っても通じないが、北海道と言えば通じる。「あの島か」という風に言われる。そこの中の一番大きい都市札幌といえどもイメージとして弱いというのを痛感した。先ほど、オーストラリアではニセコがという話がありましたが、これは、オーストラリア人は皆スキーに行くから、それでメインになってきているのだと思う。それで、札幌を推すという上で、先ほど北海道の首都という話があったが、その部分だけでは弱さを感じる。たとえば、先ほどのオーストラリアの例で言うと、オーストラリアの首都をシドニーだと思っている人もいます。では、キャンベラに行って何をしたいかということになると、ガイドブックを見ても「静かなる首都」としか書いていなくて、それ以上何もないという感じなので、やはりオーストラリアといたら真っ先に出てくる都市といえばシドニーがあって、ゴールドコーストがあって、上の方に行けばケアンズがあってという感じである。中心であるという内容の推しだけではなくて、札幌の特有、固有のものというのを前面に押し出していかないとブランドイメージというのは上がっていかないという印象がある。具体的には、今札幌で行われているものであれば2月に開催する雪まつりや、よさこいソーラン祭りなど、既存のイベントをもっと押し出すということもできるし、あとは年間を通して活用できるとなれば、札幌自体が自然の側面と都市の側面が共存する街であるという印象を推していくという方が大事であると思う。単純に首都と言うだけではなく、もっと具体的に推さなきゃいけないなという気がする。

ブランドイメージを高めるということにより、札幌市民が外に出て行った時に、自分の街である札幌をどう思うかというところが変わってくると思う。これが最初に言った誇れる街札幌というところに帰着するのだが、海外に行った時に皆が自分自身の出身地である神戸を知っていることが誇れるというか、この街出身で良かったと思うところがある。神戸は私にとって第一の故郷であるが、この第二の故郷である札幌が海外で知られていないのは寂しさがある。北海道でも良いが、札幌という街を知ってほしい。海外に出ても皆が知っている街になるということで、誇れる街というものを作っていけると思う。札幌の市民にとってもある種のアイデンティティとなると思うので、国際都市を作るうえで、誇れる街札幌という一つのビジョンを作っていくのもいいのではないかな。

<石井座長>

なかなかその「誇れるもの」を象徴的に一つや二つにしていくというのが実は今までも上手くできなかった部分があると思う。悪い意味だけでとらえられているが、雪がこれほど降る大都市というのは珍しく、雪と大都市というのはあまり結びつくものではないので、個人的にはそういう売り方もあるのではないかと考えている。ただ、実態としては住んでる人たちが雪というのはあまり良い物だと思っておらず、その感情がベースにあるのでなかなか浸透していかないということがあると思う。そこが一番難しいというか、国際化の問題とは別として、市民の思いがまだ結実していないところがあるという気がする。

<佐藤委員>

札幌はこれだけ雪が降るのだから、他の国からすればやはり売り物になるはずである。

<石井座長>

多分、異文化に向けては売り物になると思う。特にアジアをターゲットにした場合は売り物になると思うので、より前面に出すということがあっても良いように思う。

<佐藤委員>

北海道の中心というだけでは札幌のイメージが足りないと思う。たとえば、タイなら「微笑みの国タイ」であるとか、キャッチフレーズを出している。そうすると良いイメージが湧く。さっき先生がおっしゃられたように、たとえば雪なら「スノービューティーの札幌」など、標語的なものも良いと思う。

<熊谷委員>

もう札幌を知っている留学生などにとっては、雪や冬のイメージが強すぎて敬遠してしまうということもあると思うので、観光以外の人に対して冬の売り込みをどうするのかというのも課題の一つであると思う。

また、「国際都市」といっているが、「国際」というと国対国というイメージがある。自分はシドニーに詳しいので思うのかもしれない。オーストラリアでは「多文化都市」ということを言っている。日本の中の多文化都市という話もあったが、そういう考えも一つ必要なのではないかと思う。

あと、北海道と競うという意味ではなく、北海道は自然やおいしい食材などがあり、札幌は札幌で、都会と自然や、コンテンツ産業としての初音ミクなどがある。この前通訳の教材に使ったが、初音ミクが札幌出身であるということを誰も知らないのが驚いた。IT やコンテンツ産業など、そういうものに興味をもって日本に留学に来る交換留学生なども多い。しかし、そういう誇れるものを市民が知らない。

<石井座長>

加藤丈晴委員、お願いします。

<加藤（丈）委員>

札幌のイメージと北海道のイメージについて、私も先日、太平洋地域の法律家が集まるローエイシア（LAWASIA）という国際会議がソウルであった。札幌弁護士会には国際室というのがあり、韓国の弁護士会や外国の弁護士会と協力をする、あるいは北海道に住んでいる外国人の方と弁護士会の窓口になるため立ち上げた。私も国際室のメンバーであり、その派遣で国際会議に出席してきた。アジア太平洋地域の弁護士、特に香港や中国、韓国の弁護士と話をしていた、名刺を差し出すと、北海道という文字を見るだけで「Hokkaido! I envy you」というような反応が返ってきて北海道ネタで話が進むが、アメリカから来た弁護士たちはきょとんとして、北海道のことを全く知らない様子であった。地域性もあるので、アジア圏の人にとってインパクトがあるということもあるが、欧米圏の人に札幌というのをイメージづけるのも大切である。特にアジア圏の人たちにとっては、日本にあるけれどヨーロッパのようだ、とか、自然が多いのがアジアではないようだとかいうところで、観光地として人気があるというようである。では、ヨーロッパ圏の人にとって北海道の魅力ってなんだろうと考えると、なかなか見出しにくい部分があったりする。それをどう特徴づけるかというのを札幌というブランドイメージからも一つ考えなくてはならないのではと思う。

あと、これまでの話は札幌をどう売り出すかというところであったが、資料にもあるバンクーバーやシドニーといういわゆる国際都市では、街を歩いている自分も自分が外国人のような気がしない都市であると思う。それはもちろん多民族国家で、色々な民族の方々がいるからということもあるが、やはり人々の意識、街の人に話しかけた時、英語が下手でも非常に丁寧に聞いてくれるし、道を聞いたときに外国人だと思っても、顔色一つ変えずに応じてくれる。あとはそれぞれのコミュニティである。例えば日本人のコミュニティもあればインド人のコミュニティ、欧米系のコミュニティもあって、それぞれのコミュ

ニティできちんとした情報発信がされていて、必要な情報がいつでも手に入る。もちろん行政や、裁判所に行ったときも、きちんと外国人向けのセミナーをやっている。たとえばバンクーバーであれば、語学学校で勉強している人たちのためのセミナーを何日に開催するが来られますか、という感じで紹介を受けたりする。もちろん、訪れる人が多くて、住んでいる人が多いからという側面もあると思う。住んでいる人、あるいは訪れた人がアクセスしやすい公共の機関や窓口、あるいはイベントというものがあって、そういうものが国際都市というイメージを作り上げるというか、行った人が「あそこは雰囲気の良い街だった」というものがブランドイメージを作るということもある。観光的に、あるいは全く札幌を知らない人にどう知ってもらおうかという視点ももちろん大事だと思うが、来た人が「なんて過ごしやすい街なのだろう」と思う、あるいはある程度長期間滞在する人にとって、とても住みやすい街だという印象を持ってもらうためにはどうしたら良いのかという視点を持つことも大切だと思う。

あとは、自分自身も多文化共生ということをやっているが、その場合は旅行で訪れる人というよりは住んでいる人、もしくはある程度長期間滞在する人にとって住みやすい街というものを考える。先ほどの資料の中にも、外国人がどんどん増えているというのがあったが、その中でも特に中国人の登録者の数が 2 倍くらいに増えているということだが、これは一体どういう理由によるものなのかということを考えていた。このように、国籍ごとの動きなどを把握し、それに対応した色々な施策をするなどが必要になると思った。

<石井座長>

中国人の登録者数が増えている理由としては、留学生が挙げられるのではないか。私のいる大学もそうであるが、急速に中国人の留学生が増えている。

<加藤（丈）委員>

留学生の伸びに比べても登録者の伸びが多いように感じる。

<石井座長>

張委員いかがですか

<張委員>

今の留学生の件に関しては、あくまで私の個人的な感想だが、中国は改革解放で 1980 年代以降からこの 2~3 年前までは「先進国に行って勉強をしよう」という意識が強かった。日本も留学生を 30 万人受け入れようとか色々な企画があったと思う。日本は先進国なので、日本に行けば、アルバイトをして多少でも蓄えられるというのもあったが、今後は間違いなく、日本に行けばお金を蓄えられるという目的で来る人は減っていくと思う。だから、本当に日本や北海道に魅力がなければ行かないというようになる。今までは右肩上がり

あったが、これからも右肩上がりかどうかは非常に疑問が残る。

それから、本題に戻って 2 点。まず、札幌が国際都市を目指す意味は何かということに関して、これはとても大事であると思う。札幌市も道も含めて、色々な国際会議に出席していて、一生懸命進めていこうとしているのを感じる。ただ、私は、札幌の国際化の一番の障害は意外と札幌市民ではないかと思っている。札幌が国際都市になることが札幌市民にどういうメリットを与えるのかということをもっと明確に発信する必要があると思う。多文化になることで元気になったり、活性化になったりということもあると思うが、もっと具体的に整理をしておく必要がある。市民の協力がなければ国際都市というのは実現できないと思う。観光客が増えても、市民の中には反対する声も多い。なので、国際都市を目指す意味の部分にはメリットを具体的に盛り込むと良いと思う。そのためには札幌が目指しうる国際都市像とは何かというところにリンクして検討していけばいいのかなという気がした。

2 点目として、私は北海道に来て 16 年であり、札幌に住んで素晴らしいと思うのは、北海道があることよっての札幌のライフスタイルだと思う。冬は冬なりに満喫できる楽しいものがたくさんあって、夏は夏である。それをいかに札幌ライフスタイルとしてブランドをつけていくかというのが大事である。札幌ライフスタイルの輸出と国際化が出来れば経済の発展に繋がっていくと思う。長期滞在もライフスタイルの輸出の一つであり、観光もその一つである。そういう意味で、もう一つの委員会の「まちづくり戦略ビジョン」があるが、その内容ともよく吟味しながら、何が一番、世界で誇れる札幌ライフスタイルであるかをよく話をしていけば、春夏秋冬遊ぶだけでなく、寒冷地の技術であるとか、建物などがブランドとなれば輸出に繋がり経済効果もあると思う。色々良いところがあるが、札幌ライフスタイルをいかに確立して、明確に PR できるかということに尽きると思う。

<石井座長>

ありがとうございます。

<サムット委員>

なぜ外国人が多いかということに関して、私が見てきたのは、観光も一つであるが、外国語である。タイ人で 30 人くらい円山の語学学校に通っている人がいる。5 年前はそうではなかったが最近増えているので聞いてみると、「北海道は標準語を使っている」「東京に行かなくても北海道は安い」と言う。大阪に行けば大阪弁になってしまうかもしれないという問題があるので。「安い」「大体標準語である」という理由から、北海道で日本語を勉強する人が多い。

あと、先程意見があった札幌市民にどういうメリットがあるかということに関しては、日本もこれから認めてかなければならないと思うが、人口が今後減っていくということ。この経済規模を支えていくには人材が必要であるので、今後色々な国の人の力を借りなが

らやっっていかなければならない。最初は北海道に住んでいる外国人を活かしていけば良い。日本の本当の現状を認めて、今後どのように北海道、札幌を元気にしていくかということが大切である。国際化の上で大切なのは、北海道が元気になること、将来の札幌も元気にさせることである。だから、そういうことを一つずつ市民にわかってもらうのが大事である。たとえば、今後人口はこうなる、地下鉄の運営のための税金が足りなくなる、などきちんと説明すべきである。外国人も悪い人ばかりではない。いい人もたくさんいる。どのような基準で外国人を増やすのかということに関しては、例としては大学院卒なら札幌には住める、など。日本の新聞などでは外国人の犯罪が取り上げられることもあり、日本に外国人が多くなると治安が悪くなるのではないかというイメージが先行してしまっている。しかし、実際に外国人が起こした犯罪というのは 0.数パーセントの範囲である。札幌は特別で、最初から国際都市であるので、日本の先進の役割として、どういう外国人を札幌に住ませたいかということをも具体的に作っていけると思う。札幌も強く押したら、法務省も後で変わってくると思う。

<石井座長>

ありがとうございます。一つ目の論点は一旦ここで切らせていただき、まだ発言いただいてない方も、次のテーマに併せて発言いただければと思う。基本的に街を元気にするという意味での国際化だということはある程度共通の意見であったと思う。そのために、誇れる街札幌の確立や、住みやすい街であるということがある意味国際化の前提条件であり、国際化を積極的に進める要因であるというような意見が大きな意見としてあったと思う。次の、目指しうる国際都市像というところで発言をいただきながら、1の部分でも発言するところがあれば発言いただきたい。

<加藤（由）委員>

国際都市とは何かというところの定義は別として、イメージというところでは、一つは、今までは札幌は一つの大きなブランドであったと思う。ところが、熊谷先生がおっしゃったように、だんだん札幌ではなく北海道になってきている。だから、大きなブランドの中にあつたコンテンツが、今は独立をして、札幌ブランドなら札幌ブランドという風になっている。たとえば川西の長いもとかが地域ブランドの認証をとった。あとは夕張メロンなど、農産品は特区の中心として、製造業にもブランドが出てきて、それだけで売れるというものが出てきた。大きなブランドの下で庇護されて育ってきた小さなブランドというのも否定できないが、札幌は今まで大きなブランドであったため、あぐらをかいていたのではないかというのが一つある。しかし、その上に大きな北海道ブランドというものが来た場合にどのように札幌と北海道をイメージ戦略で変えるのかということが難しいことの一つであると思う。

もう一つとしては、外からの目と市民の目のギャップというのは確かにある。観光局の、

札幌市民が思う観光スポットと他の地域から来る観光客の思う観光スポットのイメージ戦略のものを見た時に、市民の「思い込み」があると感じた。この「思い込み」を排除していくのに何が必要かを考えたときに、細かく色々な話をしていくべきなのだろうと感じた。観光を学んでいる学生でも現状はこうであるということ、データをきっちり昔からご覧なさいという、自分で考えていたイメージと異なってくるようである。特に春節だ、中国人の観光客がたくさん来ている、などとなった時も「中国人」というのは、中華人民共和国から来た人のことを言っているのか、それとも中華圏から来た人のことを言っているのか。実際の統計上のデータでいえば、まだまだ台湾や香港の方が、北海道というか札幌を好きで、リピーター率も非常に高い。しかし、そのあたりの感覚が、市民にしてみると「中国人が旅行で来ている」といった時に、メインランドからきてお金を使っているという印象となる。それを払しょくしていくためには、私たちが個別に「実はこうなのだ」ということをはっきりさせていかななくてはいけないのだという気がする。逆に言えば、「国際都市にします」と言った時に、国際都市は他はどこにあるのかということも市民レベルで詰めていかなければならない。そうしないとビジョンとしてある、ぼんやりした「国際都市札幌」というブランドがつぶれていくことになるのではないかと思う。2と3の部分では、イメージだけではなく、札幌市民が実際にどう考えているのかというのをパブリックコメントだけではなく、実際に引き上げるようなものがあっても良いのではと思っている。

<石井座長>

目指しうる国際都市像というのはなかなか難しい論点になっていますが、石山委員はいかがですか。

<石山委員>

1にからめてお話をさせていただきたい。まず、国際化のプランとして、もっと経済の部分を全面に出していく方がいいのではと思う。住みやすいというのは、観光の中では当然目指すべきものではあるが、先ほどサムット委員もおっしゃっていたように、働きやすく、色々な人が働ける環境というのを作るということ。内需拡大というのはもうありえない世界になってきているので、生産人口が減っていくということは、その分経済も小さくなっていくということである。その経済を大きくしていくためには、色々なところから人口を増やして行って、経済の力を補っていくしかないと思うので、この観点を踏まえながら「働きやすい」というキーワードも入れていくのが良いと思う。そのために最大の障害となっているのはビザの問題である。沖縄県も去年の4月から数次ビザの発給権を特例として貰っているが、札幌もそのような動きをもっとして、観光だけではなく、働けるビザ特区というようなものも踏まえながら、札幌の国際都市というのはこういう形なのだということを考えるのが良い。すべての人が住みやすいし、働きやすいという環境づくりにチャレンジするのが良いと思う。

住みやすい街ということに関しては、現在外国から来ている方の多くが団体旅行という形式で来ている。空港に着いたらバスに乗って、市内を少し見て、また次の観光地にバスで移動するという形がまだまだ7~8割を占めている。ようやく香港からのお客様が、業界用語で言うFIT、いわゆる個人旅行の形態になってきている。台湾、韓国のお客様も徐々に個人旅行化している。いずれ中国もそうなってくると思う。そうなった時に、地元の人が住みやすい、ホスピタリティ力が高いということが受け入れ態勢の能力に関わってくることなので、住みやすい街、ホスピタリティ力の高い街ということが、今後の観光都市としての器の大きさに関わってくると思う。国際都市と名乗っていく中で、この部分も重要であると思う。住みやすい、働きやすいの中でも特に働きやすいというところを全面的に考えていくべきであると思う。

目指しうる国際都市像というところに関しては、先ほども色々な委員の皆様からお話しがあったが、どこに対して発信するかによって当然戦略は変わってくると思う。そこを踏まえながら、アジアに発信するものなのか、欧米に発信するものなのか、それとも札幌に住んでいる人に発信するものなのかということを考えながら目指していきたいと思う。

<石井座長>

ありがとうございます。観光面での国際化ということで言うと、国内からの来客数が減っていく中で、外国人をどうカバーしていくかという部分と、その過程で旅行代金がどんどん低額化しているという現状があると思うが、この状態のまま数が増えていくということは好ましいのかどうかという問題があるのではないかと。

<石山委員>

好ましくありません。そこはホスピタリティという部分に繋がっていくと思うが、北海道の宿泊料金というのは本州の相場から見ると7割程度で、冬場でいえば半分以下である。これが北海道の宿泊料金であるが、ではサービスはどうかというと、さして変わらなかったりする。北海道の人はそこをどう理解をして、どうしたらサービスを高められて、その対価をいただけるのかということ、観光業に携わる人が自覚を持っていかなければいけないと思う。北海道が本州と違うところは、客室数の多い施設が多いので、どうしても埋めなければならないという、相反するところがあり、そこが宿泊料金を下げている要因でもある。そうではなくて、いわゆるマーチャンダイジング機能というか、一つの館の中で、どのようにしたら最大の販売額を得られるのかというところを業界として研究もしていきながらホスピタリティも高めていけば「旅行代金が高い」と言われなくなっていくと思う。そうすることによって、経済の底上げもされると思う。安かろう悪かろうではなく、高くても良い物を少しずつ提供していけるようにこの業界もなっていきたいし、なっていかなければならない。去年の3.11があった時に、そこに頼り切っていた施設さんは結構廃業に追い込まれたケースもあった。皆さんも新聞などでバス会社や宿泊施設がその業

態をやめなければいけないというのを目にしたと思うが、質を高めていけば決してそういうことはないという事実にもなっているので、そこも含めて考えていければと思っている。

<石井座長>

多分、経済面での戦略性というものはそういう面から組み立てていかなければいけないのだと思う。新規のものというよりは、現状の課題を解決していく中で経済的なプラスの効果というものを生み出していくという視点が必要である。雨貝委員はいかがですか。

<雨貝委員>

この国際化の資料を見ると、札幌の高い知名度というのを挙げているが、ヨーロッパの方に行って「札幌」というと、みな「おお」と言って、すごく親しみを感じて寄ってきてくれたりする。また、日本の明治時代かの歴史などを知っている方もいて、オーストリア、ドイツ、チェコの人とはとても興味を示していただいている。そういうわけで、地域によって札幌のとらえ方というのは随分違ってくるのではないかと皆さんの話を聞いて思った。

今からの札幌の国際都市というと、漠然と国際化といわないで、地域的にどこか目標を決めるのが良いのではないか。偏るという意味ではなく、方向性を決めるということが、今現在の札幌にとっては大切だと思う。

文化で言えば PMF というのは大成功であると思う。音楽家仲間の間では、どこへ行っても知名度が高い。たとえばハンガリーのリスト音楽院に行っても、大きなポスターで「Sapporo PMF」と募集がしてあるので、とても効果的であると思う。経済的にも大変嬉しいが、これはずっと続けていって欲しいと思っている。これはひとつの成功の企画である。

あと、札幌の国際化というのは、札幌の良いところを見出す一つの契機であると思う。皆さんにとってどういうところが魅力があるのか、これをもう一度点検してみる必要があると思う。単純な例で言うと、雪まつりなどのイベントがあるが、これをただ単に催すだけではなくて、外国の人を招待するなどの定期的な仕組みというのにも必要なのではないかと思う。ミュンヘンの大通のイベントもそうであるが、ミュンヘンとは少し途切れているような感じもあるし、何かを定期的に、継続的にやるというのが国際化の発展にも繋がっていくと思う。

<石井座長>

ありがとうございます。今 PMF の話を出していただいたが、私はとても実利的で恐縮だが、種をまいたのだからそろそろ刈り取って、教育音楽祭なので、育った方を呼び戻すという次のステージにいかなくちゃいけないと思っている。そういうことを札幌で色々な形でできたら、まさに収穫期と言ったら怒られるかもしれないが、投資したリターンを目に見える形で見せるということが出来るのではないか。むしろこういったことを全面的に考えて

いってはどうかと思う。

3の国際都市になるためにというところに移っていただく。いろんな資源活用や何を必要と考えるかというところでご意見をいただきたい。

<サムット委員>

どういう資源を活用していくかという点では、一番良い例は雪まつりの国際コンクールである。11丁目で、色々な国の人を招待してイベントをやっている。小さいものではあるが、意外に宣伝力は高い。タイが札幌のことをよく知っているのは、11丁目のことが大きい。なぜかと言うと、タイは3年連続優勝している。全国のテレビも新聞も全て一面札幌である。これに対して札幌は一円も払わなくてもいい、もしくは宿泊費くらいしか払わなくていいので、そこをもっと活用すべきであると思う。タイ政府の観光庁はとてもこのことに力を入れている。今年もその雪像のために30人の政府関係者とバス7台と、タイのテレビ7社が来る。それは、タイ政府がお金を出して連れてくるので、今回もタイのテレビは生放送で7日間やる。この情報について札幌市は知らない。実は11丁目にはあまり人は行かないとか、誰も知らないとかあまりタイの人には言いたくないが、タイの人は新聞などで見ているのでとても大きく感じている。だからイメージは少し違うが、今ではタイでは知らない人はいない。昔はそうではなかった。だから、今あるイベントを国際化させるのが良いと思う。たとえばよさこいソーラン祭りでも、日本のチームだけでも良いが、国際化のためには色々な国のチームが参加できる方が良い。去年も台湾が参加したと思う。チームが参加すれば、その国のマスコミも一緒についてくる。マスコミが来れば必ず放送してくれる。その国がまだマスコミを連れてくる予算がなければ、こちらが招待してあげれば良い。よさこいソーラン祭りはまだタイではあまり知られていない。なぜかと言うと、タイ政府観光庁がまだあまり興味を示していなく、CMも流していないので。だから、逆に札幌市から要請して、最初の投資を少しだけすると良い。タイでも人気が出たらタイ政府も協力したくなると思う。だから、何を活用していくかの一つはイベントである。あともう一つは、北海道に住んでいる外国人を活用するということである。

<石井座長>

ありがとうございました。張委員はいかがですか。

<張委員>

2について少し意見を言いたい。国際都市像というのは、指標をどんなものにするのかということが大事だと思う。今までの反省として、指標がきちんと数字になって、それが達成できているかどうか、果たしてその指標が何であるかなどがある。国際都市像というのは、私は交流人口と定住人口で決まると思う。貿易が増えるから国際都市かというところではない。やはり交流・定住人口がキーワードである。中国は貿易が世界一でも国際都市では

ないと思う。そのためにどういう指標を作るかである。留学生の数なのか、定住者の数なのか、コンベンションの数なのか、誘致企業の数なのか、色々あると思うが、今ここになりもので考えると、外国語を話せる人材の数がどれだけいるかという指標も重要である。どれだけ正式な通訳がいるのかということである。コンベンションを増やしたいと言った時に、コンベンションをするたびに通訳を全て東京から連れてくるのでは国際都市として少し厳しい。活用すべきものというのはアクションプランにも関係があるので後程。

<石井座長>

今の指標の話はとても重要な話になるのだろうと思う。戦略プランにおいてもこういったことを盛り込むとすると、手段が目的化しないような指標というのも重要であると思う。まさに、札幌市らしい国際化を何で見るかということであると思う。そこは是非色々議論できればと思う。他に国際都市として使うべき資源などのところでご意見があれば。

木村委員どうぞ。

<木村委員>

資源の中で、一番使える資源というのは、先ほど阻害材料になるというお話もあったが、札幌市民であると思う。先ほど石山委員からお話があった、個人旅行がこれから増えていく傾向にあるという話だが、実際に観光客に会ったり、見ていて感じることは中華圏の方は団体旅行が多いという印象を受ける。自分が韓国への留学経験があるというのがあるが、韓国語圏からの人間は個人旅行が多く、地下鉄やバスの乗り場で困っていたり、やりとりが全然通じないというところを見かけることがあった。そういうところを見かけると、自分自身困っていたこともあったし、今はある程度韓国語が話せるので間に入るということもあった。こういうことは、自分がいない場所でも何件も起こっているということをつくづく思う。それで、韓国語を喋れる人間は少ないとしても、ペラペラに話せる人は別であるとしても、中学、高校とやってきているはずなので英語はある程度話せるはずであるが、皆話しかけない、話しかけられても無視をするということがある。観光客の人は「実際には英語を喋れるはずなのに誰も答えてくれない」と言う人が多い。これは、日本人特有の、事なかれ主義というか、喋って通じなかったらどうしようというのがあるのかもしれないが、自分から話しかけていこうという意識醸成というか、意識を作っていくということが必要なのではと思う。そうすると、190万の札幌市民の全てとは言わないが、その大部分がこの国際化の資源として活用されていくのではないかと思う。

そのために具体的には、市民に対して、国際的部分を感じてもらおうというイベントが良いと思う。先ほど委員から招待する仕組みという話があったが、他の都市の例でいうと韓国のウサン市が今度の2月にイベントを開いて、その際には各姉妹都市の代表団を呼んでいる。この間札幌も大田（テジョン）と姉妹都市を組んだ時に札幌市から市民訪問団を出したが、そういうことをある程度定期的に行うのが良いと思う。その時はある程度の費用

負担があったようであるが、その費用負担に関して、それぞれの都市で相互不徴収など、大学の姉妹校のような形の協定等を組みながら、なるべく負担のかからない往来の機会を増やすというのが良いと思う。

あとは、実際に現地に行かなくても、自分の住んでいる地域で交流をするというものの一つとして、数の上では留学生がある。あとは、札幌市にも派遣されている国際交流員を活用しても良いと思う。JET プログラムでロシアやアメリカの交流員が来ているという話を聞いている。韓国からも 4 月から新しい交流員が来るという話を聞いている。このような交流員をもっと活用すべきである。学校訪問が多いと聞いているが、地域レベルの公民館などでイベントを催せるような、もっと市民に密着したところ、学校ではなくて一般市民が参加できる場所でやっていくというのが重要であると思う。それをするによって、札幌市民という大きな資源が活用されていくのではないかと思う。

<石井座長>

ありがとうございます。ターゲットが大きすぎるので、どうセグメント化して攻めるかというところは色々考えなくてはいけないところであると思う。

<加藤（由）委員>

今のことに加えて、先ほども大きなブランド小さなブランドという話をしたが、学生に札幌の観光の問題点を挙げてみようと言うと、いつの間にか札幌の観点からどんどんはずれて「北海道観光」の話になる。逆に、北海道観光について話していると、自分の住んでいる札幌に話が集約されていく。札幌市民は北海道民でもあるわけだが、どうもこの関係が一緒に考えられていると思う。札幌が国際化したら、北海道はどうなるのだろうかというものも見えなければいけないと思う。一般市民からしたら、どこがどこであるという境界線は非常にわかりにくく、雑ばくなまとめ方になってしまうのではと思う。道州制についても、では道州制をやると言った時に、札幌市はどうなるのかという問題がある。中国は、中央制度があって、省があって、各市に政府があって、という、同じスタイルであるが、市が持っている強大な権力をみると、では札幌市はどうか。色々な場面で北海道をちらちらとしている。けん制をしているわけではないが。札幌市らしさを出すのであれば、そこを出していく。北海道の約 1/3 の人口が札幌に集まっているので、札幌の行く末というのは北海道の行く末であるというぐらいの気構えで掘り起しをしなければいけないという気がする。

<石井座長>

ありがとうございます。私も、事前に意見をというふうに言われた時に、道庁とはむしろ張り合って、関係なく戦略を立てられたらいかがかと申した。その点は同意見である。ただ、逆に北海道という知名度は活かせばよいので、上手に戦略として考えるのが、矛盾

しない中でやれる一つの方法であるということを感じたので、また色々考えていただければと思う。時間がなくなってしまったが、下の方の施策展開イメージなどで意見があればというところまで進めなくてはならなかったのだが、関連する意見は出ていたが。何かどうしても言っておきたいことがある方はいますか。

<サムット委員>

指標として、例えば、今の札幌市の外国人登録者数の割合は0.5%を10%の目標数値にするなどはいかがか。国際化は、色々な人種がいれば、色々な発想、色々な考えが出来るという私の考えがある。日本人だけではなく、色々な国の人がいれば色々な可能性や、私たちの知らないものが出てくるということである。なので、例えば、その10%の人はどんな人がいいかなどを具体的に話していけばいいと思う。

<石井座長>

一番わかりやすい指標だと思う。札幌市の政策誘導でどこまで動かせるかということ、多分ほんの少ししか動かせないと思うが、そういうことも踏まえて議論をしてゆくのだと思う。いずれにしろ、シンプルで重要な指標を狙おうという意見であったと思うので、ご検討いただければと思う。

私の進め方が乱暴ではあったが、ご協力いただいて議論を進めていただいた。大変貴重なご意見ありがとうございました。今日の議論の内容につきましては事務局にまとめていただき、踏まえた上で次回の会議の時にプランの素案ということでご提示いただく。よろしく願います。残りは事務局にお預けする。

<今井国際部長>

それでは、冒頭で申し上げたが、ここで井上総務局長よりご挨拶させていただく。

<井上総務局長>

紹介いただきました総務局長の井上です。色々仕事と仕事と重なり、遅れて参りまして申し訳ありません。まずは、札幌市国際戦略プラン懇談会の委員へのご就任と、第一回会議の出席について感謝を申し上げたい。札幌市では、オリンピックの前年に策定した第一次長期総合計画から現在に至るまで、継続して北方圏の拠点都市たることを標榜し、国際的な相互理解や国際平和の実現を目標として施策を展開してきた。平成14年に策定した札幌市国際化推進プランにおいても、札幌市の国際化推進の理念を掲げて、その実現に向けた取り組みを市民、企業、行政が共同で進めてきた。そのプランからちょうど10年経ち、今回その改定を行うことになったので皆様に委員をお願いした。今回は、これまでの計画の策定とは置かれている状況が違うと思っている。その思っていることをお話しさせていただき、挨拶に代えさせていただきたい。

第一次長期総合計画策定はオリンピックの前年なので昭和46年である。札幌は人口もどんどん増えていて、それにつれてGDPもどんどん伸びるという時期であった。また、北海道の公共事業がものすごい勢いで増える時期であったので、昭和46年の予算額は2,060億円であったが、その後どんどん増えて、平成9年には1兆59億円となった。ただし、その後急激に減り、平成22年は4,857億円ということで、ほぼ昭和52～53年のレベルである。昭和46年の札幌市の人口は105万人であるが、平成9年には178万人。平成22年に190万人となった。このように、人口も経済も、ほぼ国内、域内の要因だけで右肩上がりになるという状況のなかでは、自治体における国際化の意味は相互理解や平和がメインであっても良かったと思う。ただ、時代は大きく変わってきていて、超高齢社会の到来やグローバル化の進行のなか、国内や域内の力だけでは、街の活力を維持していくのは困難な状況になっているし、今後ますますこの傾向は強まると思う。このような状況の中で札幌市の国際化は、これまでの、国際理解、相互平和の実現だけではない。正確に言えば、今までも街の想像力や経済の活性化というものは含まれてはいたが、そこをより強く意識した国際化施策の位置づけや市民施策が必要になってくると思う。もう一つ思っているのは、国際化を目指すに当たって、具体的な目標を市民の皆さんにお示しをし、施策を展開する必要があるということである。札幌市が目指す国際化とは、具体的にどういうことなのか、貿易額なのか、来道者数なのか、居住者数なのか。どこに重点をおき、どのような施策を打って、どの程度の数値目標をとるのかということをよく議論していかなければと思っている。

札幌は、国内の地域ブランド調査において2年連続で1位ということで、魅力的な都市としての高い評価をいただいている。札幌だけではなく、北海道全体に言えることだが、今ある資源を最大限に活用して、真の国際都市になることが出来れば、札幌は今後も元気で魅力あふれる街であり続けられると思っている。この度の国際戦略プランについては、真の国際都市となるために10年で目指すべき札幌像を描いて、大きく舵切りをする非常に重要な分岐点になると認識をしている。本日は、既に皆様方より貴重なご意見をいただいたと思っているが、これからさらに議論を深めていただき、地に足の着いた戦略となるように進めていきたいと思っている。どうぞ引き続きご協力をよろしくお願いしたい。